# エコー疑問文のメタ表示と関連性評価

河　野　　　武

## 1.　序　　論

エコー疑問文（以下 EQ）は，次の例が示すように，典型的に相手の発話や考えに触発された問い返しの発話である。

⑴　A: I'm a guitar addict.
　　B1: You're a guitar addict?
　　B2: You're a what addict?
⑵　A: Did you call the POlice?
　　B: POlice?  I called the poLICE.
　　　　（但し，大文字部分は強勢音節を表す）（Noh 1998: 610）

関連性理論以前の研究（Banfield (1982)，Quirk et al. (1985)，Huddleston (1988)，McCawley (1988)，Radford（1988）等）では，EQ の次のような特性に注意が払われてきた。まず第一に，EQ は，先行発話（統語的には何であれ）の完全なないしは部分的な反復であること。上の例では，（1A）の平叙文，（2A）の疑問文を踏まえて，それぞれ（1B1），（2B）のような完全なないしは焦点のみ表出した EQ が形成されている。注目されてきた第二の特性は，EQ は統語的には対応する純粋の疑問文よりもエコーの対象となる先行発話との相通性が強いことである。(1B1）においては，平叙文の統語形式に質問の態度を表す上昇調のイントネーションが加わっただけであり，一般の yes-no 疑問文の基本的性質は顕現しない。また，(1B2）においても，一見典型的な wh 疑問文との共通性が高いように思われるが，そもそもこの文では wh-移動も不可能であり，先行発話の構成素の一部を wh で置き換えた特殊な疑問文であることが分かる。このことは，EQ は，統語的には疑問文である必要はなく，語用論的にある種の〈質問〉態度を表す発話と見なすべきことを示唆するものである。EQ の第三の特性は，先行発話の形式ないしは内容を明確化する機能をもつ点である。(2B）では相手の発話に含まれる語の強勢の位置といった音声形に言及しているし，(1B1, B2）ではむしろ発話の中身に言及している。

関連性理論の枠組みを用いた研究（Blakemore（1994)，Noh（1998)，Iwata（2003)）では，EQ に埋め込まれている相手の発話や考えの表示と〈質問〉態度を同定すべく，「メタ表示」と「高次表意」という概念を用いた解法を提示している。メタ表示とは，相手（あるいは場合によっては話者自身）の発話や考えに帰せられるメッセージの表示を指す。また，高次表意は命題態度や発語内行為のような話者の発話態度を表す。これらの研究は基本的な認識では一致しているが，細部の定式化が微妙に異なっており，さらなる精密化の余地を残している。

本論では，先行する関連性理論による EQ の分析を吟味し，関連性理論の枠組みでの別の解法を提示する。さらに，EQ の表意であるメタ表示の〈質問〉からどのような一般的含意が引き出されるかを究明する。

## 2.　関連性理論による先行研究の検討

### 2.1　Blakemore（1994）

Blakemore（1994）は，Sperber & Wilson（1986）の概念的レイアウトに従いながら，EQ を「エコー的」（echoic）かつ「解釈的」（interpretive）な発話と位置づけた。エコー的発話とするのは，EQ が他者に帰属する発話・考えに言及しつつ同時に話者の発話態度を表出するからであり，解釈的発話とみなすのは，もとになった発話・考えはそのまま転写されるわけではなく，状況に応じて話者による様々な言い換えが起こるからである。次の例を見てみたい。

⑶　A: ... and then you add a tablespoon of cayenne pepper.
　　B: A TABLESPOON（of cayenne）?
⑷　A: Mr. Clinton will be speaking tonight.
　　B: The president will be speaking WHEN?

上の（3B）では，もとの発話の一部が焦点化されて言及されているし，（4B）では，指示の仕方にすり替えがあるが，もちろん適格な言い換えである。また，EQ の〈質問〉の中核部分は次のような内容となっている。

... a ... general concern, namely, whether B's utterance（the echo question）is a faithful enough representation of A's utterance, or, in the case of wh-echo, what would make B's utterance an adequately faithful representation of A's utterance.（Blakemore 1994: 205）

つまりは，EQ がもとの発話を十分に忠実に表示しているかどうか，あるいはそのような表示を得るための wh の値は何かを問う〈質問〉である。EQ に託された発話態度はこれにとどまらず，この問いが話者にとって関連的か，それとも相手にとって関連的かによって，相手の発話の表現ないしは内容の確認が伝えられたり，相手の発話の不備（例えば，言い間違い）に対する注意の喚起や，発話内容のばかばかしさが表明されたりする。

このように，関連性理論による Blakemore の EQ 分析は，全体的に見て正しい軌道に乗ったものと言える。ただ，Noh（1998）も指摘するように，先行発話の存在を前提にしない EQ が取り挙げられておらず，より完全な規定のためには相応の修正を施す必要がある。

### 2.2　Noh（1998）

Noh（1998）は，Blakemore の洞察を引き継ぎながら，異なった用語を用いて理論の焼き直しを図っている。EQ には，すでにメタ言語的否定や引用（直接引用，間接引用，自由間接引用）との相通性が気づかれている（Horn 1989，Clark & Gerrig 1990，Carston 1996)。次の例を参照。

⑸　A: Did you call the POlice?
　　B: I didn't call the POlice. I called the poLICE.
⑹　（A is talking to B about her meeting with her supervisor）

A: Then, what did she say?
B: She said the argument is invalid.

このような事実と関連性理論自体の理論的進展を背景にして，Noh は EQ で言及されている元発話・考えは「他者（時に話者自身）に帰属する発話・考えのメタ表示」（attributed metarepresentation）であるとした。EQ に関与する発話態度は，言うまでもなく，このメタ表示を作用域にした〈質問〉態度である。Noh の EQ の規定は次のように集約される。

... echo questions communicate higher-order explicatures appropriate to interrogative utterances, determined by *wh*-words or rising intonation; but embedded under these may be metarepresentations of the higher-level explicatures of the previous utterance.（Noh 1998: 620）

ここで，高次表意と称される発話態度がメタ表示の内側と外側に現れることに注目しておきたい。内側の高次表意は元発話の命題内容から推論によって構築されたものであり，すでに話者による相手の発話行為の命名という解釈過程が介在している。外側の高次表意は，内側の高次表意を含めたメタ表示全体にかかるものである。次の具体例を見てみたい。

(7) A: I'm leaving on Tuesday.
B1: You're leaving on Tuesday?
B2: You're leaving when?
(8) A: Have you read "Great Expectations"?
B1: Have I read "Great Expectations"?
B2: Have I read what?
(9) A: Talk to a fortune-teller.
B1: Talk to a fortune-teller?
B2: Talk to what/who?
(10) B1′: Are you saying that you're leaving on Tuesday?
B2′: When are you saying that you're leaving?
(11) B1′: Are you asking whether I have read "Great Expectations"?
B2′: Of what are you asking me whether I have read it?
(12) B1′: Are you telling me to talk to a fortune-teller?
B2′: What/Who are you telling me to talk to?

上の(7)〜(9)の EQ はそれぞれ(10)〜(12)のようにパラフレーズされる。
Noh の分析では，次のような，先行発話を欠く EQ も射程に入れられている。

(13) A: [A walks towards the door.]
B1: You're leaving?
B2: You're going where?
(14) After proceeding 1 mile in an hour, a driver sees a road sign which reads 'ROADWORKS AHEAD, DELAYS POSSIBLE'. The driver says: "Delays possible?"

(13)の EQ は相手の行動を手がかりにして得られた相手の考えの解釈的表示である。一方，(14)の EQ

の問いかけは，一見道路標示の指示内容に対してなされているように思われるかもしれないが，実はそうではなく，道路標識の管轄責任者のそのような指示内容に関与する考えが対象となっている。

### 2.3　Iwata（2003）

関連性理論による最新の再定式化が Iwata（2003）である。Iwata は，第一に，EQ は統語的認可を受けない質問であるとした。典型的な疑問文とは異なり，EQ は主語・助動詞の倒置や wh-移動を伴わず，EQに質問の資格を与える唯一の手段は上昇調のイントネーションにあるとみなした。第二に，Noh と軌を一にして，EQ は相手に帰属するメタ表示であるとし，合わせて次のように規定している。

... EQs, involving attributive metarepresentation, undergo pragmatic enrichment to indicate the attribution of the metarepresentation, and it is precisely this attribution that combines with the questioning attitude conveyed by the rising intonation to yield the speech act information 'Did you say ...?' (Iwata 2003: 206)

上の規定のうち，まず，上昇調のイントネーションが質問態度の確実なマーカーであり得るかについては，Bolinger（1987, 1989）の洞察と照らし合わせて見るとき，大いに議論の余地があると言わざるを得ない。一般的に，yes-no 疑問文（さらに言えばあらゆる文形式）に固有のイントネーションを対応付けるのが難しいのと同様に，EQ と上昇調を一対一に結びつけることは早計である（Geluykens 1988，河野 1994，1996，2001）。確かに，EQ が結果的に上昇調を取ることは確率的には高いであろう。ただ，やっかいな問題は，EQ が聞き返しの〈質問〉態度と共にさらに別の発話態度を同時に表出することである。そもそも，純然たる聞き返しの〈質問〉態度のみが関与する EQ が存在するかどうか疑わしい。EQ の抑揚型は，むしろ，〈質問〉態度と同期する他の発話態度を反映すると見るのが適切である。

こうして，〈驚き〉・〈疑念〉の態度が加われば，上昇調（詳しく言えば低上昇調）が発現するであろうし，〈無関心〉（'lack of real curiosity'（Bolinger 1989: 134））や〈言い切り〉（'readiness to draw a conclusion'（ibid.））は下降調を生ずるであろう。Iwata は，Bartels 1999 や Cruttenden 1986 に従って，典型的に下降調を取るエコー感嘆文を EQ と区別しているが，エコー発話の下位類として相互にどのように対応づけるべきか，イントネーションの機能と関連づけてさらに検討を加える必要がある。

Iwata は，Noh とはやや趣を異にする EQ の定式化を提出している。例えば，次の(15)の EQ は(16)のように定式化される。

(15)　A: He is a gentleman.
　　　B: He is a gentleman?

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| (16) | *I ask whether* | *you said*$_1$ | 〈*you say*$_2$ | *it is the case* | [*he is a gentleman*]〉. |
| | Question | attribution | neustic | tropic | proposition |

なお，(16)において，くさび形括弧内の構成部分はメタ表示を表し，メタ表示の構成素の 'neustic' と 'tropic' は Hare（1971）及び Lyons（1977）を援用して，それぞれ発話行為（の中核成分）と命題内容の真偽性や望ましさへの話者のコミットを表示する。陳述の発話行為を表す項目が you said$_1$ と you say$_2$ に反復して現れているが，メタ表示内の元発話の 'neustic' は，間接引用や命題・文等の抽象的な言及のような他のメタ表示と共通に，不活性要素となる。その結果，(16)は最終的に

は次のような規定となるとされる。

⒄ *I ask whether* *you said*$_1$ 〈*it is the case* [*he is a gentleman*]〉.
Question attribution tropic proposition

Iwata は，EQ の質問は you said$_1$ に直接関与するものであり，you say$_2$ には関与しないとみなしており，そのような分析を支持する Noh の枠組みから予測される次のような規定は適切でないと判断している。

⒅ I ask whether 〈you said$_2$ it is the case [he is a gentleman]〉.

Iwata の⒃，⒄の定式化でさらに補足しておけば，メタ表示が相手の考えに源泉がある場合には，you said$_1$ は ‘you believe/think’ に取って代わられるようになっている。

さて，Iwata の上記の定式にはいくつかの問題が生ずる。まず第一に，メタ表示内の you say$_2$ の位置付けである。元発話の遂行的な陳述行為は定義上 I say（ないしは we say）でなければならないはずである。I said が遂行的ではあり得ないと同様に，you say はもはや遂行的ではなく，発話行為の他者による記述に過ぎない。すなわち，この you say$_2$ は元発話の発話行為の話者による解釈的な特徴付けなのである。（そうなると，発話行為のメタ表示形は，Noh の分析のように過去時制を伴う you said$_2$ の方がより適切なものとなる。）

これと連動して，第二の問題は，‘attribution’ の you said$_1$ とメタ表示内の you say$_2$ との余剰性である。EQ の引き金となった発話の話者が他者の発話を間接引用しているような多層的な表示の場合は別として，EQ のような相手の発話をメタ表示する場合には，メタ表示することで相手への発話・考えの帰属化は同時に満たされるのである。従って，Iwata の次のような見方は支持できない。

Metarepresenting an utterance or a thought is one thing; attributing it to some person/thing is quite another. (Iwata 2003: 226)

EQ の基底の式形である⒃においては，本来 you said$_1$ は存在しないと見るべきである。相手の発話行為の解釈的な反映物は，むしろ下位の saying で具現している。Iwata の主張に反して，メタ表示内の you say$_2$ は不活性要素とはならない。このように考えると，EQ の定式化は，Iwata の擁護する⒄よりもNoh の提唱する⒅の方がより好ましいものとなる。（しかし，Noh の定式化は，後の節でさらに洗練化するつもりである。）

Iwata の定式化の第三の問題は，EQ の質問を表示する I ask whether の部分についてである。Hare＝Lyons 説に従えば，発話は ‘neustic’，‘tropic’，‘phrastic’（＝proposition）の三つの構成素から成り立っているのであるから，⒃のように，埋め込まれた発話のみにこの構造を設定するのは正当化されない。より一貫性を通すためには，上位の発話に対しても同様の区別を適用しなければならないであろう。これを受け入れるならば，⒃は次のように再定式化されることになろう。

⒆ 〈I ask whether it is the case [you said$_1$ 〈you say$_2$ it is the case [he is a gentleman]〉]〉.

言うまでもなく，I ask は ‘neustic’，whether it is the case は ‘tropic’，you said$_1$ 以下は命題を表す。

EQ に関する Iwata の提案の第三の項目は「メタ表示の焦点」（focus of metarepre-sentation）である。EQ に限らず，すべての発話は文強勢を表現媒体とする焦点をもつ。発話処理を効率よく

行えるようにするためには，焦点となる情報に相手の注意を向けさせ，背景情報を組み込みながら発話処理のための適切な予測的想定を引き出させる必要がある。EQ の焦点を画定することは〈質問〉の作用域を同定することであって，焦点の手続き的役割に考慮を払うのは至当である。

## 3. エコー疑問文の表意と含意：メタ表示の〈質問〉と関連性評価

前節で検討したように，関連性理論による EQ の共通認識は，第一に，(ｉ)疑問の対象は相手に帰属する発話・考えの話者によるメタ表示であること，第二に，(ii)疑問はそのメタ表示が的確なものであるかを問うものであること，である。この共通の基盤に立ちながらも，Blakemore，Noh，Iwata はテクニカルな点で相違を示していた。本論では，Noh 及び Iwata の分析を修正する形で，EQ を次のように定式化したい（但し，ここでの命題内容は，仮に he is a gentleman であるとしておく）。

⒇ I ask whether it is the case [you said it is the case [he is a gentleman]].

この定式化から明らかなように，you said 以下の埋め込み部分はメタ表示であり，それ自体命題である。また，発話の構成素である ‘neustic’ の（whether/(that)）it is the case は，メタ表示内にも上位節にも現れていることに注意したい。上位節の ‘neustic’ は，話者の解釈を介在させたメタ表示が当たっているかどうかを表す要素である。さらに，you said はメタ表示の構成素であるから，話者によってそのように名付けられたものであり，エコーの引き金となった元発話の発話行為を直接反映したものではないことに注意しておきたい。

さて，今までの議論を振り返ってみると，EQ の定式化は EQ の表意の規定であったことが理解できる。関連性理論の関心の中心はそこに向けられてきた。これとは対照的に，EQ の一般的含意ないしは機能については深い洞察は得られておらず，相手の発話に対する「情報確認」ないしは「不信態度」の表出機能が指摘されているだけである。そこで，以下，EQ の一般的含意・機能について議論しておきたい。

そもそも，EQ によって⒇のような表意を伝えつつ，さらにどのような文脈的含意を相手に引き出させようとしているのであろうか。この問題を解明するために，EQ の話者が相手の答えを確信しているかどうかに着目してみたい。まず，相手の答えが予測できないと想定される次のような場合を見てみよう。

(21) A: This animal is totally quecivorous.
B1: This animal is totally quecivorous?
B2: This animal is totally what?

(22) A: He voiced a querimony.
B1: He voiced a querimony?
B2: He voiced a what?

これらの EQ は，耳慣れない語句や文脈から想像しにくい表現に出会った際の確認ないしは明確化のためのものである。それぞれ，B 2 のような wh-EQ は言うまでもなく，B 1 のような yes-no-EQ においても，相手の答えは最初から予測できている訳ではない。メタ表示自体が怪しげなものであるから，メタ表示の真偽を問う EQ は真正なものである。

EQ は，一方で，相手の答えが明白であると判断される場合にも用いられる。例えば，次のよう

な例を見てみよう。

(23) A: We trapped two mongeese.
B: You trapped two mongeese? You mean “mongooses”.
(24) A: Did you call the POlice?
B: POlice? I called the poLICE.（但し，大文字部分は強勢音節を表す）

上の EQ はメタ言語的発話であるが，元発話のメタ表示に確信の持てない要素が含まれているわけではない。相手の発話はきちんと捉えていることを確信しつつ，あえておうむ返しの発話を投げかけているのである。この場合の発話意図は何であろうか。「情報確認」ではないことはすぐ分かるが，では伝達内容に関する何らかの「不信態度」ないしは「驚き」が伴っているとしてよいであろうか。私見によれば，これらの発話態度はいずれも事実を捉えきれていないと思われる。ここでの話者は，相手の発話に含まれる文法的（形態論的・音韻論的）逸脱に注意を向けさせようとしていることは明らかである。このような言語的に不備のある発話では，この場で求められている関連性を満足させることはできないことに気づかせようとしているのである。ここで，EQ 発話をわざわざ行う労力の価値について注目しておきたい。相手の発話をフィードバックすることは一見無駄なように見えるかもしれない。しかし，よく考えてみれば分かるように，自分の発した発話を突き返されることによって，元発話者には発話の関連性を再考するきっかけが生ずるであろう。相手の発話の不適切性を指摘するだけであれば，わざわざ EQ のような発話を提示する必要はない。上の例においては，それぞれ B の EQ に後続する発話があればその目的を果たすことができるからである。このように，EQ の根本的機能は，相手に発話の関連性について再考を促すことにあるといえる。

メタ言語的ではない EQ の事例についても，新しい視点から眺めてみよう。すでに見た次の例を検討してみたい。

(25) A: I’m leaving on Tuesday.
B1: You’re leaving on Tuesday?
B2: You’re leaving when?
(26) A: Have you read “Great Expectations”?
B1: Have I read “Great Expectations”?
B2: Have I read what?
(27) A: Talk to a fortune-teller.
B1: Talk to a fortune-teller?
B2: Talk to what/who?

上の EQ は，それぞれ B 1 については yes の答えが確信をもって予測され，B 2 については wh- の中身が問うまでもなく明らかであると判断される状況であるとしよう。これらの EQ も，表意としては自分の受け取った発話・考え（すなわちメタ表示）は元発話・考えに照らし合わせてみて適切か否かを質問している。この表意を基点にして様々な含意を導き出すことが意図されている。例えば，(25)では，相手が出発の日にちについて思い違いしていることに気づかせようとしているかもしれないし，あるいは相手の突然の予定変更に当惑していることを伝えようとしているかもしれない。また，(26)では，自分の読書の好みに関する相手による認識が適切なものであったか否かに再考を促しているかもしれない。さらに(27) では，相手のアドバイスが場違いな，ないしは場当たり的

な無責任なものであることに思い至らせようとしていることもありうる。これらの文脈的含意に通底するのは，エコーの引き金となった元発話に託された関連性の見通しについて再考を促しているエコー発話者のスタンスである。達成すべき関連性がほどよく計算されていれば，会話はなめらかに展開されるはずである。しかし，関連性に誤算があれば，相手からもう一度計算し直すよう求められるであろう。このようにして，与えられた認知環境において，相手の発話・考えは最適の関連性を達成することが見通されていたかどうかが問われることになる。コミュニケーションを行う際，話者に常に要求されるのは，関連性への気配りである。話者がそれへの配慮を怠ったり，非意図的に失敗したりしたことが見て取れた場合には，聞き手はそれを指摘する権利がある。

今度は，エコーする相手が無生物の場合を考察しておきたい。次の例を参照されたい。（なお，⒇は先に検討した。）

⒇ After proceeding 1 mile in an hour, a driver sees a road sign which reads ‘ROADWORKS AHEAD, DELAYS POSSIBLE’. The driver says: “Delays possible?”
(29) Looking at a London map, a freshman at University College says: “The British Museum is near University College?”

道路標示や地図と対話することはむろん不可能であるから，ここでのエコーは話者の何らかの心理的葛藤を解消するための見せかけないしはポーズの発話である。ここでの発話は，表意としては，EQ の形式を借りて，問題の道路標示・地図の情報内容が話者のメタ表示に合致するか否かを一応問いかけていると言える。EQ の受け手は問題の道路標識や地図そのものではなく，間接的に，それに関与する当局者であるとみなすことも十分可能であるが，この問いはむしろ独白と見た方がよいであろう。(25) では，道路工事に加えて渋滞も被らなければならなくなりそうな事態に憤りを表している。道路工事の予告はすでに承知していたかもしれないが，渋滞のことは予想外の情報であったかもしれない。一方，(26)では，大学のロケーションを考える上で重要なランドマークの一つである大英博物館との地理的関係はとうに把握しておくべきであったのに，この段になってようやくその認識に至ったことへの軽い後悔ないしは失望のようなものが表されている。両者に共通する心的態度は，情報に接する時期，ないしは気付く時期が遅すぎたことに対する不満である。もっと早い時期に問題の情報を把握していれば，もっと関連性の高い情報となったはずだとする感慨の表出である。ここでは，エコーの相手が人間の場合と異なり，相手に関連性への気配りを再考させることはできないので，そうでなければ関連性がもっと高かったはずの情報を受け損なった非を話者自身に向けているのである。

## 4. エコー疑問文とメタ言語的否定との相違

ある種の EQ とメタ言語的否定は先行発話に言及する点で共通性をもつ。次の例を対比的に観察してみたい。

(30) A: Did you call the POlice?
B: POlice?  I called the poLICE.（但し，大文字部分は強勢音節を表す）
(31) A: Did you call the POlice?
B: I didn’t call the POlice. I called the poLICE.
(32) A: We have a half-empty bottle of wine.

B: Half-empty?  It's half-full.

(33) A: We have a half-empty bottle of wine.
B: It is not half-empty.  It's half-full.

(30)と(31)，及び(32)と(33)の対比から明らかなように，メタ言語的否定はEQと同様に先行発話の形式と伝達内容のいずれにも言及しうる。(28)では音韻形式の一部を成す語強勢が問題にされているし，(30)では相手の発話の含意である「ワインの残量が少ない」という想定に異を唱えている。このように，より一般的に，メタ言語的否定はメタ言語的EQとの並行性を示す。

しかしながら，EQとメタ言語的否定は明確に異なった発話態度を伝える。EQの表意は，すでに見たように，話者による相手の発話・考えのメタ表示が適切なものであるか否かを問う〈質問〉態度であった。これとは対照的に，メタ言語的否定が表出するのは，相手の発話が適切なものではない趣旨の〈却下〉の態度である。EQは，さらに，一般的含意として，元発話が達成すべき関連性の度合いを元発話者が適切に計算しているかどうかに再考を促す意も伝える。EQは，このようにして発話を元発話者に突き返すことによって，相手に元発話の関連性について吟味する機会を与えている。一方，メタ言語的否定は，このような手の込んだ伝達方法に訴えることなく，単刀直入に相手の発話の言語的・文脈的逸脱を正す形を取る。

EQの表意が〈質問〉態度であり，メタ言語的否定の表意が〈却下〉態度（すなわち〈主張〉態度の下位類）であることの帰結として，相手からの応答を誘発するか否かの違いがある。EQを伴う対話の規範的な展開は次のようなものである。

(34) A: Did you call the POlice?
B: POlice?
A: Yes.
B: I called the poLICE.

(35) A: Talk to a fortune-teller.
B: Talk to what?
A: A fortune-teller.
B: You're kidding me.

上のように，EQを投げかけ，相手の応答を確認してから元発話への答えないしはコメントを提示するのがこの種の対話の規範形である。しかし，聴解上の確認のような場合を除いて，多くのEQでは相手の応答は話者にとって明白であるので，相手の応答はスキップされることが多い。もっとも，答えさせるまでもなく明白な答えをあえて答えさせることにはそれ相応の発話モダリティ的効果があることも認識しておかなければならない。(34)では奇妙な発音への自覚を促しているし，(35)ではまじめな助言とも思えない発話の再吟味を誘発している。いずれにせよ，EQには相手からの応答のプロセスが顕示的・非顕示的に介在するが，メタ言語的否定にはこのプロセスは関与しない。メタ言語的否定は，EQに較べて断定的な響きを帯びる。

## 5. 結　　論

本論では，EQの表意と一般的含意について明らかにした。表意はメタ表示についての〈質問〉であり，答えが不明な場合は話者の確認のためであり，自明な場合は相手の発話・考えの確認のた

めである。この表意を手がかりにして，相手の関連性評価に関する含意が伝えられる。エコーの引き金となった発話を生成するにあたって，相手が関連性の度合いを適切に計算していたかどうかに反省を促す趣旨である。EQは，情報伝達の観点から一見無駄なプロセスのように見えるが，実はそうではない。EQ によってフィードバックされた発話は元発話者によって再び心的に，ないしは実際に再現され，その間に発話の適切性が再吟味されるはずである。このプロセスこそ EQ の核心をなすものである。関連性への気配りを喚起することによって，当面の発話の問題点を改善する方向に相手を導くのみ成らず，発話の生成者としてのさらなる自覚を促すことになる。

**参考文献**


Banfield, A. 1982. Unspeakable sentences: Narration and representation in the language of fiction. Boston: Routledge & Kegan Paul.

Bartels, C. 1999. The intonation of English statements and questions: A compositional interpretation. New York & London: Garland.

Blakemore, D. 1994. Echo questions: A pragmatic account. Lingua 94, 197-211.

Bolinger, D. 1987. Echoes reechoed. American Speech 62, 262-279.

Bolinger, D. 1989. Intonation and its uses. Stanford: Stanford University Press.

Carston, R. 1996. Metalinguistic negation and echoic use. Journal of Pragmatics 25, 306-330.

Clark, H. and R. Gerrig. 1990. Quotations as demonstrations. Language 66: 764-805.

Cruttenden, A. 1986. Intonation. Cambridge: Cambridge University Press.

Geluykens, R. 1988. On the myth of rising intonation in polar questions. Journal of Pragmatics 12, 467-485.

Hare, R.M. 1971. Practical inferences. London: Macmillan.

Horn, L. 1989. A natural history of negation. Chicago: University of Chicago Press.

Huddleston, R. 1994. The contrast between interrogatives and questions. Journal of Linguistics 30, 411-439.

Iwata, S. 2003. Echo questions are interrogatives? Another version of a metarepresentational analysis. Linguistics and Philosophy 26, 185-254.

河野　武 1994.「『関連性』とイントネーション」,『大妻レヴュー』第 27 号，75-89。

河野　武 1996.「イントネーションの関連性モダリティ理論」,『音韻研究―理論と実践』東京：開拓社。

河野　武 2001.「付加疑問文の関連性モダリティ」,『大妻女子大学紀要（文系)』第 33 号，35-46。

Lyons, J. 1977. Semantics. Cambridge: Cambridge University Press.

McCawley, J. 1987. The syntax of English echoes. CLS 23, 246-258.

Noh, E.-J. 1998. Echo questions: Metarepresentation and pragmatic enrichment. Linguistics and Philosophy 21, 603-628.

O'Connor, J. D. and G.F. Arnold. 1973. Intonation of colloquial English, 2nd ed. London: Longman.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. A comprehensive grammar of the English language. London: Longman.

Radford, A. 1988. Transformational grammar. Cambridge: Cambridge University Press.

Sperber, D. and D. Wilson. 1986. Relevance: Communication and cognition. Oxford: Basil Blackwell.